

飛身長目

通巻164号 平成29年7月1日発行

訣れにのぞんで

森信三

■天意を拝して

さて私の諸君に対する授業もいよいよ今日が最後となりました。思えばこの一年間長いといえは長く、短いと言えは短い感もしますが、とにかくここに一度の終末に達したことに對しては、多少の考えなきを得ないものがあります。それにしても生れて初めて二部生としての諸君に接し得たという事は、私として生涯の経験と申してよいでしょう。と申すのは実は今日まで申さずにいましたが、たぶん私はこの四月から満州の建国大学の方へ参ることになるかと思われるからであります。してみれば諸君との訣れは一人諸君らの組と訣れるということのみではなく、一応師範教育そのものとの訣れともなるわけであります。私はそれが我が身にとって果たしてどういう意義を持つかを知りません。ただ師のお言葉を通してそこに天意を拝してお受けするものであります。

■差し迫る国家の存亡

さて普通に私の考えから申せば、訣れに臨んだからとて別に事改めて申すべき事はないはずであります。何となれば私は諸君もご承知のように、こうした勝手な形式によって授業してまいりましたから、その時その時に一応自分の精一杯を傾けて諸君に接してきたからであります。しかもこれが諸君との最後の訣れかと思えば、ここに一つの最も重大なる事を申さねばならぬ気がいたします。特にそれは先ほども申したように、私自身が近く旬日じゆんじつの中に大陸の一角に身を置く事を思う時、痛切なるものがあります。ではそれはいかなることかと申せば、昨年の四月以来諸君に向かって語ってきた事柄は、これを要するに国民教育者の道というものであります。換言すれば国民教育者の常道とも言うべきものであります。その点についてはもちろん不十分な点は多々ありますけれど、しかし私自身としては一応全力を尽くしたつもりであります。しかるに眼を翻せば諸君のうち大部分の人は卒業と同時に短期現役兵として、入営するわけであります。しかも私の見る所を以てすれば、時局は今

や諸君ら短期現役兵をも近き将来において直接戦線に出さずにおかぬものがあるうと思われるのであります。諸君はこの点に関して現在のどの程度に考えているかかもしれませんが、私の心眼に映ずるものは実にただいま申しした通りであります。かつて私は今や諸君との最後の訣れにのぞんで一言この点について申しておきたいと思うのであります。

かつては師範学校の卒業生の兵役関係は六週間現役兵とあって、わずかに42日間兵営生活をするのみでありました。現に私などもその一人であります。最もこ

なる兵営見物というような生ぬるいものではなく、いや私などのときには、普通の兵は午睡をとっていても、六週間現役兵は特に練兵が続けられたものでした。しかし何といつても六週間では不足であるというので、ご承知のように数年前から五ヶ月の短期現役兵に改められたのであります。

そもそも師範学校の卒業生を特に六週間現役にしたのは、国家が国民教育の重大性を認識するところから出た特別の処

置であつたのであります。国家の实情は国民教育者に軍事国防の認識と体験とを要することが加速度的に増大してきたのであつて、これ六週間の現役兵より短期現役兵へと制度の移行をみた所以であります。しかも私の見るところをもつてすれば、現在の短期現役兵制度もやがてはその変更を免れないのではないかと思われまふ。けだし国防の重大性は今やいかなる論議をも要せぬほどに切実であり、従つて国民教育者はひとり軍事国防の重大性の認識を有すれば、それに足るという程度を、国家の現状は今や打ち超えねばならぬところまできているからであります。

■無上の光栄

かくして現在の諸君は一応短期現役兵として入営するのではあります。国家の現状は近き将来において、諸君自ら銃剣をとつて護国の第一線につく場合ある事を多分に考えしめられるのであります。

これ諸君として無上の光栄であつて、これまで国民教育者が生徒には殉国の大義を説きつつ、身自らは直接その境に起

つを得なかつたところから生ずる、どことはなしのもどかしさというようなものが払拭せられて、諸君は渾身の情熱を傾けて小国民に殉皇の道を説く資格ができるわけであります。もちろんお互い日本人である以上、殉皇の大義は明々白々の大道であります。しかし我が身自身がいづれ大命を拝して護国の第一線に起つかと否とでは、その児童に与える感銘において重大なる差を生ずるといへましよう。この意味において諸君は私共六週間現役出身者に比して真に国民教育者としての大任が果たせると言えるのであります。

さて、入営後の心得、ないしは只今も申したように大命を拝して、護国の第一線に就く場合の心得については、少なくともその根本態度としては、すでに一学期において杉本中佐について述べたところに尽きていることと思ひます。(一学期に二回にわたつて杉本中佐ならびにその著「大義」について講ぜられたるも、杉本中佐については、すでに教授録(1)に載せあるを以て、重複をおそれ本巻には省略するなり。編者付記) もちろん実際上の具体的な事柄につい

ては、それぞれ実地軍務に服した上で教えられることでありましょう。しかしながら根本の態度についてはあらかじめ用意をして心の腰を据えている必要があるのです。そしてこのことは大命を拝する場合において、特にその然るを覚えるのであります。

■二冊の書物を

もちろん我々日本国民として大命を拝する場合は根本の御教えが軍人勅諭に存することは今更申すまでもありません。しかも御勅諭はその高きことまさに天日のその如くであります。我々民草としては、その高大無辺の聖旨を拝戴するにいうべきものを要するとも言えましょう。これ私がかつて諸君に対して杉本中佐について語り、その「大義」の精神の一端をご紹介します所以であります。されば私はこの期に臨んで再びこれを繰り返えそりませぬ。ただ私として諸君に対して、最後に希望したい事柄は、諸君が入営するに際しては二冊の書物を持参せられる

ようにということでもあります。しからばその二冊の書物とは何であるか。その第一は「明治天皇御集」であり、今一つは杉本中佐の「大義」であります。もし諸君にして杉本中佐の「大義」を通して「軍人勅諭」ならびに「明治天皇御集」の御精神の一端に触れ奉ることができたならば、その時諸君は初めて皇軍の一員たるの資格を生ずるであります。

かくして諸君が首尾よく短期現役を終わった後、国民教育者として教壇上に殉国の大義を小国民の心に植えつけるか、はたまた諸君自らその五尺の体をひつさげて直接殉皇護国の大義に生きるかは、かく語っている間にも刻々に展開しつつある皇国の「いのち」そのものが決定することでありましょう。私自身は先ほども申したように、旬日をへだてて、大陸の一角に身を置くことになりましょうが、しかも私の予見にして誤たずんば、おそらく今後数年の間に諸君のうち相当部分の人々が身を大陸の一隅に置くこととなるであります。しかも私は素っ裸で身を東亜諸民族の優秀青年の間投するのであるのに対して、諸君は銃剣をと

って大陸の叢の中に立つのである。しかもかくお互いに大陸の一隅に身を置くようになりまして、おそらくは互いに相見する機会がありますまい。ここにも私どもは現実界の制約の厳粛さを思わずにはいられません。したがって我々のすべてが再び相会するという事は、少なくともこの肉体をもって相会するという事は、今後まず絶対にないと思わねばなりません。ではこれをもって永々の拙い話を結ぶお訣れの言葉といたしたいと思ひます。

〔修身教授録〕第三卷昭和18年9月1日同志同行社刊

二年後には敗戦の憂き目に遭うとは知らず、差し迫る国情の状況を勘案しつつ、当時の痛恨な師の心情が哀しい。自らも大陸へ赴く立場であることを明かし、眼前の同志たる教え子に対して、短く、ご自身へも聞かせて自ら納得させるような、最終通牒的永訣覚悟の講義かと拝察する。現代のわれわれは、かかる貴重な講義から、森信三先生の立場を正面から忖度したい。

(二繁)

第三次大戦を考える (微言)

森信三

○二十世紀の前半から後半への転入が、第三次世界大戦への危機感を最大契機として行われるということは、人間から見れば、実に最深の苦悩と言わなければならぬ。

○しかし神自身がそれを如何に思召すかは、われわれ人知をもつてしては到底不可把握である。神意いづこにおはしますかを知らんとする者は、静かに冷厳なる世界史の進行を見る外ないであろう。

○世界が二大対立を形成して、今にも一触即発的状态におかれていますということ、は、われわれ人間としては、実に最深の不安であつて、その不安たるや全く有史以来未曾有であると言つてよい。

○しかし今もし神眼よりこれを眺めたならば、恐らくそれは世界を全一たらしめ給わんとする神の御心の現れとも言えるであろう。

○神愛は、端的には、第三次戦を経ずして世界を一つたらしめんとせられる処にあるであろう。そうしてわれわれはその最も明白なる徴標を原爆において見るのである。

○もしわれわれ人類にして、神のこの御心に素直に従うことができなかったならば、神は世界を一つたらしめんとする御心を達成せんがためには、第三次大戦をも拒み給はぬであろう。

○国際状況は、今日奇蹟の起らぬかぎり、遺憾ながら、後者の歩みをとりに思召される。「人類の愚やついに測るべからず」という外ないであろうが、そこに人類の果さねばならぬ業があるのである。

○もし第三次大戦が避けえられぬとした場合、地球は恐らく「第二のノアの洪水」の惨状を呈することであろう。第一次の「ノアの洪水」は、水禍であつたが、第二次のノアの洪水は、原爆禍としての火の禍であろう。

○第一次のノアの洪水が地上を泥海に化したとすれば、第二のノアの洪水は、地上を火の海と化するであらう。かくして世界前史の終末は神の審判を以て境せられるとも言えるであろう。

○もし第三次大戦が、ここ一、二年のうちに起ると仮定した場合、どれほどの長期戦となるかは分らぬが、ほど確かに予言しうることは、その復旧はおそらく二十世紀の全後半を費やしても尚かつ不十

分だということである。

○かく考えればキリストの真精神はその没後二千年の紀元二千年にして初めて、地上にその実現を開始すると言えらるう。

○これを遅しという勿れ、またそれを早きに過ぎるといふ勿れ。神意は、人知を越えたその絶対必然性を以て顕現するであらうから。

(「開頭」通巻45号 昭和26年1月5日発行)

あとがきに替えて

森信三先生の予言はある意味的中し、ある意味外れた。外れた部分は21世紀の今日なおISという過激イスラム信奉勢力などが跋扈している現状である。未だキリストは現れていない。世界はかかる無法過激勢力のテロに怯えている。これも神の思召ししか？人類の業は果てしなく深い……。嗚呼。(30日二繁)

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-89

電話0744-4513422

Email: hji3@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushn